

野々市市 第二次総合計画

後期基本計画

基本姿勢見直し（案）

～市民意識調査・課題整理報告書・行政評価結果（R4～R7）の統合～

石川県 野々市市

本資料の構成

目的

市民意識調査・課題整理報告書・行政評価結果（R4～R7）を統合し、後期基本計画の基本姿勢を整理します。

1

見直しの背景

社会環境の変化

2

市民意識調査

主要結果・重点課題

3

行政評価の結果

基本目標別の進捗

4

統合分析

ギャップの構造

5

基本姿勢（案）

新旧対照・全文

基本方針

前期計画の3つの基本姿勢（市民協働のまちづくり・SDGsの推進・「野々市ファン」の拡大）は継続します。基本構想は変更せず、社会環境の変化と各種調査・評価結果を踏まえた「補強」を行います。

1 見直しの背景 — 社会環境の変化

人口動向

- ▶ 令和7年国勢調査（速報値）：人口は増加
- ▶ 増加ペースは鈍化、長期的に横ばい・減少へ
- ▶ 高齢化率は上昇傾向
- ▶ 社会増減数は令和6年度から増加に転換

自然災害の頻発化・激甚化

- ▶ 能登半島地震・線状降水帯による内水被害等
- ▶ 平時の市民協働が災害時の共助に直結する
- ▶ 防災・減災の視点をまちづくりに組み込む必要性
- ▶ 災害への備えに対する市民の安心感低下

デジタル化・AIの急速な進展

- ▶ 行政DX（デジタル変革）・市民参加の多様化が横断的課題に
- ▶ AI・RPA活用して業務を効率化した業務数は目標達成
※AI・RPAとは、これまで人が行っていた定型業務を自動化し、業務負担の軽減や生産性向上につなげる仕組み
- ▶ 縦割り行政の弊害を感じる職員割合も大きく改善
- ▶ 市民と行政が協力してまちづくりを進めている実感は低下

国際情勢の不安定化・GX推進

- ▶ 資源・エネルギー価格の高騰が市民生活に影響
- ▶ 国がGX（脱炭素化）を強力に推進
- ▶ CO2排出量は目標達成水準（R6参考値）

1 見直しの背景 — 人口動向の変化

令和7年国勢調査（速報値）では人口は58,594人となり、前回調査から1,356人が増加。
長期的には横ばい・減少が見込まれます。

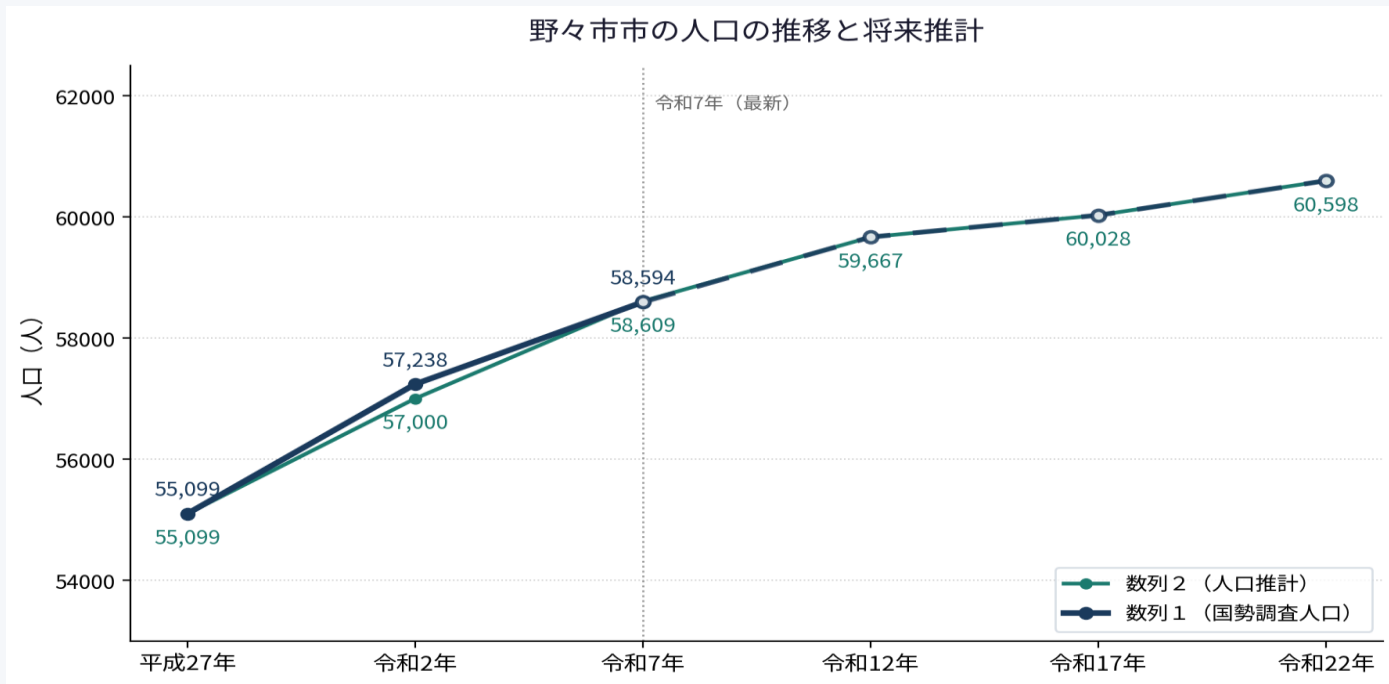


図 野々市市の人口の推移と将来推計（国勢調査・人口推計）

2 市民意識調査の概要 — 主要結果（令和7年度実施）

調査名：野々市市市民意識調査（令和7年度）

有効回収数：669件（回収率33.5%）

44.8%

「ずっと住み続けたい」

前回比▼6.8pt低下

78.3%

自家用車依存率

公共交通利用は低水準

44.2%

防災の備えが
できていない

防災情報充実が重要度第1位

12.2%

転入0～4年目の市民
愛着「強く感じる」

全体26.3%と大きな乖離

8.7%

「個性あるまち」
と感じる

外部認知・ブランド発信が弱い

市民意識調査の再分析：施策間の関連性（クロス集計より）

子育て × 教育環境

評価は強く関連している。妊娠期～就学期の切れ目ない支援が重要

住みやすさ × 防災対策

住みやすいと感じていても、防災の備えを実感する者は半数未満

地域のふれあい × 安心感

支え合いの実感が安心感の土台となる

市民参加 × 協働感

参加しやすさと協働している実感は極めて強く関連している

2 市民意識調査の概要 — 重点課題の全体像

優先度	課題テーマ	主な調査根拠	分類	対応姿勢
最優先	定住意向・愛着の低下	「ずっと住み続けたい」▼6.8pt、転入者の愛着12.2%	市民生活	基本姿勢 3
	公共交通・自家用車依存	自家用車依存78.3%、交通満足度低・重要度高	都市基盤	基本姿勢 2
	住環境コストの上昇	転出理由「生活環境が良くない」+23.1pt	都市基盤・市民生活	基本姿勢 2
	防災備えへの不安・情報不足	防災の備えが出来ていないと感じる市民44.2%、防災重要度第1位	安全・安心	基本姿勢 2
中期優先	学校教育の満足度低下	学校教育の充実が市民意識調査で満足度低・重要度高	教育・生涯学習	基本姿勢 2
	若年・転入者の愛着醸成	転入0～4年の市民の愛着12.2%、「個性あるまち」8.7%	市民生活・産業	基本姿勢 3
	文化・娯楽施設不足	転出理由「娯楽不足」18.2%	教育・産業振興	基本姿勢 3
	市民参画・協働感の低下	否定的回答の増加	行財政運営	基本姿勢 1
	自然環境・生活環境保全	市民意識調査で満足度低・重要度高となる	環境	基本姿勢 2
長期優先	高齢者・要配慮者の移動支援	自家用車依存+高齢化リスク	福祉・都市基盤	基本姿勢 2
	都市ブランド・個性の未確立	「個性あるまち」と感じる者8.7%	産業振興	基本姿勢 3

3 行政評価による前期計画の進捗状況（令和4～7年度）

目標1 まちづくりの担い手

主な成果

- 登録団体数・大学協力事業数は当初値から増加し、協働の場は拡大
- 社会増減数は令和6年度から増加に転換し、順調に推移
- 審議会等への女性登用率が31.7%→34.7%に向上

課題

- 協働実感・愛着の満足度が低下し目標との差が拡大（協働実感43.1%→36.4%、愛着77.8%→72.9%）
- 多文化共生・国際交流の満足度・実績が低調
 - ・ 国際交流員の認知度向上、姉妹都市交流の体制強化が必要
- 大学協力事業数は増加するも目標未達。量的拡大が実感向上に直結していない可能性

目標2 心のかよう福祉のまち

主な成果

- 地域ボランティア人数が目標2,000人を上回る2,271人を確保
- 待機児童数0人を維持し、こども家庭センター設置等の新たな仕組みを構築

課題

- 高齢者・障害福祉施策への満足度が低下
- 物価高騰による生活困窮者増加への懸念
- 介護給付費・国保医療費が増加し財政的持続可能性に懸念（介護費229→272千円、医療費377→446千円）
 - ・ 特定健診受診率がコロナ禍以前の水準まで回復していない

目標3 安全・安心なまち

主な成果

- 防災士数が目標360人に対し362人を確保し目標達成
- 歩道改良延長・防犯カメラ設置数・消費生活研修会開催数も目標を上回った
- 交通事故発生件数が127件→104件に減少

課題

- 災害への備えに関する市民の安心感が低下（39.4%→36.6%、目標45.0%）
- 消防団員の充足率が低下し、担い手確保が課題（84.4%→81.5%）
 - ・ 女性防災士が少ないことから増やしていくことが課題
 - ・ 犯罪発生件数は当初値を超える値が続いている

目標4 環境を考え、行動するまち

主な成果

- 家庭系・事業系ごみ排出量はいずれも減少し目標を達成
- 環境教育参加人数（672人）・普及啓発活動件数（8件）が目標を大きく上回った
- CO2排出量は令和6年度参考値で目標達成水準（令和7年度実績は未集計）

課題

- CO2排出量は令和7年度実績が未集計（9月頃公表予定）
- 空き地の除草受託面積が増加傾向で、管理委託ニーズへの適正な対応が必要
- 製品プラスチック分別収集開始に向けた関係機関との調整

3 行政評価による前期計画の進捗状況（令和4～7年度）

目標5 生涯学び楽しめるまち

主な成果

- 自己肯定感（「よいところがある」）は小6・中3とも目標を上回った
- 文化財施設利用者数・生涯学習施設行事開催数が目標を上回った
- ノーネット・ノーゲーム・ノーテレビデーの認知率が76%→97%に大きく向上

課題

- 「勉強が好きだ」割合が小6・中3とも大きく低下（小6 67.9%→54.9%、中3 57.2%→51.3%）
- 青少年ボランティア登録者数・参加率が低下し、担い手のマッチングが課題
- 図書館貸出冊数等の利用低下は生活様式変化の可能性

目標6 活気のあるまち

主な成果

- 創業支援による起業家数（172人）、ブランド認定品数（21点）、企業誘致件数（4件）等が軒並み目標を上回った
- 市の魅力発信を実感する市民割合が27.8%→33.5%に向上し目標を上回った
- 地域特産物の作付け面積拡大・ブランド化件数増加など農業分野も着実に進展

課題

- 生産者団体等による直売回数が減少（68→65回、目標74回）。学童農園の事業継続が難化
- ・ 学童農園は農地減少・学校事情により事業継続が難しくなっている
- 椿まつり来場者数は増加も目標値との差が大きく、集客力強化が課題

目標7 快適がゆきとどくまち

主な成果

- 都市公園面積・都市計画道路整備延長・コミュニティバス利用者数・上水道耐震適合率等が目標達成
- 魅力ある住環境の実感が61.7%→63.6%に改善
- 上下水道事業の経常収支比率がいずれも改善

課題

- 公共交通の利便性満足度が改善せず、目標との差が残る（32.8%→32.7%、目標36.0%）
- ・ IR野々市駅北口プラザのエレベーター等の老朽化が進み、更新検討が必要
- ・ 自由通路部分の鉄道事故防止のための定期点検の必要性

目標8 市民が支えるまち

主な成果

- 石川中央都市圏ビジョン事業数・AI・RPA活用業務数が目標を達成
- 縦割り行政の弊害を感じる職員割合が23.7%→11.8%に大きく改善し目標を達成
- 迅速・適切な行政サービスの実感が44.6%→50.5%に向上

課題

- 経常収支比率はおおむね目標達成だが、引き続き財政健全化に取り組む必要
- ・ 公共施設の老朽化進行と大型事業実施を踏まえた財政の安定化
- 他自治体との競合による職員採用の辞退者増加
- 開かれた市政への満足度の改善が小幅で、高齢者や障害者、外国人等情報弱者への配慮が必要

4 市民意識調査と行政評価の統合分析

市民意識調査（主観的評価）と行政評価（客観的達成度）を統合すると、3つのパターンが明らかになりました。

パターン①

量的整備は進むが
実感に結びつかない

防災・市民協働・公共交通など。
施策の「実施量」より市民への「見える化・
発信」が優先課題。

例：防災士数達成／防災への備えが出来ている実感
低下

パターン②

両方が一致して
課題を示す

高齢者・障害福祉の満足度低下と介護給付費
の増加、学校教育における学習意欲の低下。
後期計画における優先的対応が必要。

例：介護保険制度への満足度低下＋介護給付費増加
が一致

パターン③

行政評価の方が
良好な結果を示す

魅力発信は成功しているが独自性の実感は低
い。今後は「野々市らしさ」を再定義し、発
信内容の深化が必要。

例：魅力発信33.5%達成／個性8.7%は低水準

対応方針：①発信・実感づくり ②施策の重点強化 ③まちの個性・魅力発信の再定義

5 基本姿勢の見直し方針 — 継続と補強

3つの基本姿勢は継続。市民意識調査・行政評価の双方が示した課題に応える内容に補強する。

基本姿勢1：市民協働のまちづくり

継続

- ✓ 市民・行政・民間の対等な協働
- ✓ 役割の柔軟な調整

★補強

- ★ 協働感・参画感の低下を正面から受け止め信頼関係を最適化
- ★ デジタルを活かした参加環境の整備
- ★ 行政の説明責任・透明性の強化
- ★ 自然災害の経験：平時の協働が共助力に直結

基本姿勢2：SDGsの推進と強靱なまちづくり

継続

- ✓ SDGs・「誰一人取り残さない」
- ✓ 多様な主体との連携推進

★補強

- ★ 防災情報の充実・GX推進の対応
- ★ 高齢化を踏まえた生活の質向上
- ★ 自然環境・生活環境保全の満足度回復

基本姿勢3：「野々市ファン」の拡大

継続

- ✓ 関係人口・FAN（応援する人）+ FUN（楽しい）の二重の意味
- ✓ 巣立つ学生・転出者ともつながる

★補強

- ★ 転入者の早期定着支援
- ★ まちの個性・魅力発信の再定義
- ★ デジタルでのネットワーク強化

5 基本姿勢の新旧比較 — 一覧

	前期（現行）	後期（改訂案）
1	市民協働のまちづくり	市民協働のまちづくり 補強：協働感低下への対応・DX視点・自然災害の教訓
2	SDGsの推進	SDGsの推進と強靱なまちづくり 補強：防災・環境保全・GX等を追加
3	「野々市ファン」の拡大	「野々市ファン」の拡大 補強：転入者の早期定着支援・まちの個性・魅力発信の再定義等

※ 市民意識調査（R7）・行政評価結果（R4～R7）を統合した案です。

基本姿勢 1 新旧対照

【現行】市民協働のまちづくり

- ・ 市民・行政・民間が対等な立場で協働
- ・ それぞれの性質に応じた役割分担の調整
- ・ 幅広い分野で協働のまちづくりを定着
- ・ 市民協働の考え方をより多くの市民へ

【改訂案】市民協働のまちづくり （着色＝変更・追加箇所）

社会環境が変化し、課題が複雑化・多様化する中で、市民一人ひとりの生活の質を高め、より良い野々市市を次の世代に引き継いでいくためには、市民と行政、民間事業者などが対等な立場に立ち、協働でまちづくりを進めていくことが必要です。まちづくりに関わる活動には、それぞれの性質に応じて市民・行政・民間が立場や役割を柔軟に調整しながら進めるべき分野があります。野々市市ではこの部分を「協働」して取り組むべき分野と捉え、幅広い分野において協働のまちづくりが定着していくことをめざします。協働の場や機会を広げる取組とあわせて、市民一人ひとりが協働を実感できるよう、**デジタルを活用した参加手段の多様化や行政情報の発信・透明性の向上を進め、市民との信頼関係を高めていきます。誰もが立場や世代を問わずまちづくりに関わるができるよう、参加の入口を増やし、対話の機会を充実させていきます。**また、**自然災害の経験を踏まえ、**平時における市民同士のつながりや助け合いの関係を育み、**いざという時にも互いに支え合える、しなやかで強いコミュニティの形成**をめざします。

基本姿勢2 新旧対照

【現行】SDGsの推進

- ・ 17のゴール・「誰一人取り残さない」精神
- ・ 多様な主体（ステークホルダー）との連携
- ・ 総合計画と一体的にSDGsを推進

【改訂案】SDGsの推進と強靱なまちづくり（着色＝変更・追加箇所）

2015（平成27）年の国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）は、「誰一人取り残さない」という考え方のもと、あらゆる分野で持続可能な社会の実現に向けた取組を求めています。野々市市では、SDGs達成に向けた取組を、市民や団体、事業者などの多様な主体と連携しながら、総合計画と一体的に推進します。**高齢化の進展を踏まえ、誰もが生活の質の向上を実感できるよう**、各施策の根底にこの視点を据えて取り組みます。**国が推進するGX への対応と自然環境・生活環境の保全に向けた取り組み**を進めます。さらに、**防災情報の充実や避難支援体制の整備を進め、女性・転入者・ひとり暮らし世帯への配慮も含め、自然災害の経験を生かした強靱なまちの実現**をめざします。

基本姿勢3 新旧対照

【現行】「野々市ファン」の拡大

- ・「関係人口」に着目した独自の取組
- ・FAN（応援する人）+FUN（楽しい）の二重の意味
- ・巣立つ学生・転出者ともつながり続ける
- ・野々市市が楽しいと感じてもらえるまちづくり

【改訂案】「野々市ファン」の拡大（着色＝変更・追加箇所）

近年、移住した「定住人口」でもなく観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる「関係人口」が注目されています。野々市市は人口増加が続いてきましたが、長期的には横ばい・減少へと転じていくものと見込まれます。

「野々市ファン」の拡大にあたっては、**まず転入直後の市民に対して地域との接点を早期につくり出す取組を強化します**。行政・地域団体・大学が連携しながら、移住直後の市民が野々市市の魅力や地域のつながりを実感できる機会を積極的に設けるとともに、**野々市市らしい個性・魅力を明確に打ち出します**。また、「野々市に来たら楽しい、いたら楽しい」と感じてもらえる環境を整えます。「野々市ファン」には、応援する人を意味する「FAN」と、楽しいという意味の「FUN」の二つの意味が込められています。**SNSなどデジタルツールを積極的に活用しながら**、巣立った学生や転出者を含む「野々市ファン」のネットワークを広く、強固に育てていきます。**自然災害の経験が示すとおり、このネットワークは、有事の際にも野々市市を支える存在**として重要な意味を持ちます。

市民意識調査・行政評価の統合分析を踏まえ、
「継承」と「データに基づく対応」を両立した後期計画をめざす。

基本姿勢 1

市民協働のまちづくり

協働実感・愛着の低下を確認。
「量」から「実感」への転換が課題。

基本姿勢 2

SDGsの推進と強靱なまちづくり

防災・福祉・環境の満足度低下を確認。
防災・環境保全の強化とあわせて、GXの視点を追加。

基本姿勢 3

「野々市ファン」の拡大

魅力発信は目標達成だが、「個性」の実感は低水準。まちの個性・魅力発信の再定義が必要。